

瀬戸町(旧)・三崎町(旧)における閉校になった小中学校の校歌について The school song of the closed primary and secondary schools in Seto and Misaki

教育学部音楽講座：市川克明

序

愛媛大学地域創成年報第12号で、旧伊方町における閉校になった小中学校校歌についての調査を発表した¹。その前年度は、興居島について調査を行ったが、今回西宇和郡旧瀬戸町、旧三崎町の閉校になった学校の校歌を調査するにあたり、これまで以上にその数も多く、また資料が散逸し困難な作業となった。この地域は、ここ数十年に渡り人口の減少が著しく、多くの小中学校が閉校となった。閉校から時を経て、校歌制定当時の状況を知る者も少なくなり、また、楽譜そのものも公式には残されていない場合が多く、個人的な「繋がり」を頼っての調査となった。この意味でも、失われゆく閉校になった学校の校歌を記録にとどめることは、おそらく今が最後の機会であると言えよう。

現伊方町内では、第2次大戦後19の小学校²、および5の中学校³が閉校している。うち、旧瀬戸町、旧三崎町の閉校になった小中学校21校を調査の対象とした。なお、2018年3月現在の同町内の小学校は、伊方小学校、水ヶ浦小学校⁴(以上旧伊方町)、三机小学校、大久小学校(以上旧瀬戸町)、三崎小学校(旧三崎町)の4校、中学校は伊方中学校、瀬戸中学校、三崎中学校の3校である。

1. 旧瀬戸町・旧三崎町について⁵

現在の西宇和郡伊方町は、2005年の「平成の大合併」により旧伊方町、旧瀬戸町、旧三崎町の西宇和郡3町が合併することにより成立した⁶。伊方町は、地理的に見て極めて特殊な約40kmに及ぶ日本一長い半島であり、旧瀬戸町はその中間部、東部は旧伊方町に接し、旧三崎町は旧瀬戸町の西側で、半島の突端は九州の大分からわずか約13km

である。また、半島を東西に小高い丘が背骨のように走り、海岸線は場所により切り立った絶壁である。

小野^{ただひろ}忠^{ただひろ}氏によれば、「佐多岬半島は地形や気候要素を中心とした自然条件に、住民の人文生態^{しおなし}を含めた地理的地域」は、三机湾から塩成地区にかけての半島の最も幅の狭い場所を結んだ線の東西、および約40キロに及ぶ半島の背骨部分を境に南側の宇和海側、すなわち、I: 半島の表佐田岬、II 島嶼的表佐田岬と北側の伊予灘側、III 半島の裏佐田岬、IV 島嶼的裏佐田岬の4つに分け特徴付けられる⁷。旧伊方町はこの、IとIII、つまり半島的な部分に属し、比較的人幡浜や旧保内町との結びつきは深い。今回取り上げる、瀬戸地区と三崎地区はIIとIV、すなわち島嶼的な特徴が強く、このことは歴史的にも交通の面からも伊方地区とは異なった様相を呈していた。佐田岬半島はそのほとんどがリアス式海岸であるため、陸路では極めて往来が困難である。したがって、海上交通が主たる移動手段であったが、とりわけ島嶼的地域ではその傾向が強い。また、何度か頓挫した三机・塩成の運河建設に見られる通り、長く突き出た佐田岬半島の宇和島側と瀬戸内海側の往来は悲願であったが果たすことはできず現在に至っている⁸。陸路では、平地は少なく山林が多い佐田岬半島では昭和初期に至るまで各地区をむすぶ道路は^{りどう}里道あるいは山道であった。佐田岬半島を縦断する道路は、1958年に県道八幡浜三崎線が全線開通し、その後、1962年に二級国道に格上げされ197号線となり、大洲から大分を結ぶ重要路線となりようやく伊方地区から瀬戸・三崎地区までが整備されることとなった⁹。さらに、新国道197号線、いわゆる「佐田岬メロディライン」が1987年に完成したことにより、半島の先端まで開通し格段に現伊方町内の東西の移動、および八幡浜方面への陸路での移動、大分方面へのフェリーによる

移動など、主として車両による移動は容易になった¹⁰。

佐田岬半島における交通は、1895年に三崎八幡浜線が開業して以来、1985年の高速艇「みさき」の休航で幕を閉じるまで、明治、大正、昭和を通じ、沿岸航路が主たる移動手段であった¹¹。多い時には、年間10万人あまりの利用者がおり、八幡浜から川之石（現八幡浜市内）、加周（伊方地区）、塩成、川之浜（以上瀬戸地区）を経て三崎まで重要航路に位置付けられていた¹²。特に、1918年就航の八幡丸は何代にもわたり重要な役割を果たした¹³。

この瀬戸地区・三崎地区の「島嶼的」傾向は、学校の設立と歴史にも密接な関係を持っている。明治初期にはそれぞれの小地区が移動が極めて困難であり、里道山道が主たる交通手段であったため、各地区に小学校が設立された。そのため、この地区は特に明治初期設立の歴史ある小学校が多い。瀬戸地区では、三机浦小学校、三机小第一分校、三机小第二分校、小島簡易小学校（以上旧三机村）、川之浜小学校、大久小学校、田部小学校、神崎小学校（以上旧四ツ浜村）、三崎地区では、名取簡易小学校、釜木共進小学校、二名津小学校、明神簡易小学校、松簡易小学校（以上旧神松名村）、大佐田庵学校、三崎小学校、串簡易小学校、串小分教場（旧三崎村）と、ほぼ各「浦」ごとに小学校が設置された¹⁴。

1955年から翌年にかけてのいわゆる「昭和の大合併」時の人口は、伊方町が13361名¹⁵、瀬戸町が10163名¹⁶、三崎町が12365名で¹⁷、3町合わせ35894人であったが¹⁸、その後、約5年間で30366人と全体5千人ほど減少しており、急激な人口減はこの頃から顕著になって現れた。2005年の「平成の大合併」時の伊方町の人口は12095名で、その後、2010年には10882名¹⁹、さらにその後の5年間で人口増減率は-11.51%で、これは全県平均-3.19%、郡部平均-6.25%を大きく上回っている²⁰。県内でも久万高原町に次ぐ高さであり、2018年現在、現在の伊方町は9634名で²¹、旧3町を合わせた人口の3分の1と激減している。

学齢児童生徒の人口の激減はさらに厳しく、特に1970年代後半以降、いくつもの小中学校は統合

された。教員も自家用車による通勤が主となり、かつて存在した教員住宅もその役目を終え、瀬戸・三崎地区の小中学校は、全校児童生徒数も100を大きく割り込み、教員数も1校あたり数名というのが一般的となった。年少人口、すなわち15歳未満の人口は、2005年から10年間で伊方町全体では1438名から877名（-39.0%）で、伊方地区のみでは777名から547名（-29.6%）、瀬戸地区では278名から160名（-42.5%）、三崎地区は383名から170名（-55.6%）で、佐田岬半島の先にいくほどその減少率は高い²²。この傾向はさらに続き、伊方町内全体の年少人口は2020年には678名、2030年には491名と半減以下になることが予想されている²³。

2. 瀬戸・三崎地区の小中学校の統廃合について²⁴

瀬戸・三崎地区の小中学校の統合は1970年代後半から断続的に行われた。その結果、第2次世界大戦直後18校あった小学校が現在3校に²⁵、6校あった中学校が2校に統合された²⁶。

旧瀬戸町においては、児童生徒数激減にともない²⁷、複式学級が増え教員の負担も増えることとなった。1969年に「学校統合小委員会²⁸」が発足し、1977年10月には町議会により統合計画が承認された。結果、第一次統合においては小学校4校（三机小、塩成小、川之浜小、大久小）、中学校2校（三机中、四ツ浜中）に、第二次統合においては小学校2校（三机小、大久小）、中学校1校（瀬戸中）に統合されることが決定された。1978年に三机第二小学校が三机小学校に、三机第二中学校が三机中学校に、翌1979年、田部小学校が大久小学校に、1980年、神崎小学校が大久小学校に、1982年、足成小学校が三机小に統合された。その際、3路線のスクールバスを運行させ、児童生徒の通学に使用することになった。

さらに、1984年、学校統合委員会は第一次統合計画未実施校の統合を進めると同時に第二次統合計画も推進することを確認し、1986年小島小学校が三机小学校に統合された。結果、第一次統合計画は完全実施された。1994年、三机中学校と四ツ

浜中学校が統合し新しく瀬戸中学校が新設された。その後さらに過疎化が進み、2003年、川之浜小学校が大久小学校に、平成の大合併後、2009年に川之浜小学校が大久小学校に統合された。ここで第二次統合計画も完全実施され、現在、瀬戸地区には、三机小学校、大久小学校の小学校2校、および瀬戸中学校が存在しているのみである。

三崎地区も同様に、1970年代以降急速な過疎化が進んだ。旧瀬戸町同様学校統合計画が進み、1977年に釜木小学校、松小学校が二名津小学校に、1991年大佐田小学校が、1993年与修小学校が三崎小学校に統合された。2005年、平成の大合併と同時に正野小学校と串小学校が統合し佐田岬小学校が新設されたが、2014年三崎小学校に統合され閉校した。2013年には二名津小学校も同様に三崎小学校に統合された。中学校では、2004年には串中学校が、2006年に二名津中学校が²⁹、それぞれ三崎中学校に統合し、小中学校1校ずつとなった。

伊方地区を合わせると、元伊方町内では1970年代まで24校あった小学校が4校に、8校あった中学校が3つに統合された。

3. 閉校になった小中学校の校歌³⁰

閉校になった全小中学校21のうち、いくつかの学校についての校歌は追跡情報収集が可能であった。作詞者、あるいは作曲者、制定時の関係者など直接コンタクトを取り、インタビュー、あるいは書簡などで情報を得ることが可能であった。

しかし、楽譜そのものの入手が困難で、制定時の情報もほとんどない学校も多く、調査は非常に困難が伴った。ここでは、情報収集が可能であった学校を中心に制定にいたる経緯、内容、あるいは関係者からの情報をまとめて提示する。なお、巻末資料に楽譜と歌詞を掲載している。ほとんどの校歌は旋律のみ伝承されており、伴奏譜は現時点では入手不可能で³¹、その場合には寄稿者による伴奏付けがなされている³²。佐田岬小学校が、作曲者から提供のオリジナル楽譜を掲載している。

3. 1 ^{あしなる} 足成 小学校

足成は、瀬戸地区の最も東に位置し、伊方地区に接する伊予灘側の地名である。三机湾をはさみ三机地区と向かい合っている。

足成小学校校歌は1972年5月1日に制定された³³。作詞の村井猛氏は当時の同校校長³⁴、作曲者の岡井中一氏に関しては不明である。「潮鳴り高き伊予灘の」、「校庭のさくらやつわぶき³⁵」、「葦群繁る」、「ふすま鼻³⁶」などの自然を歌詞の中に取り入れている。

3. 2 ^{しおなし} 塩成 小学校

塩成は瀬戸地区の宇和海側、伊予灘側の三機の南側に位置し佐多岬半島の中で最も幅の狭い場所である³⁷。東は伊方地区、西は川之浜に接する。

校歌は1962年に制定され、この地域の小学校では最も早い。作詞は当時の校長であった菊岡政雄氏³⁸、作曲は当時同校音楽の教員であった三木竹次郎氏である³⁹。歌詞は「宇和の海原」、「瀬戸の門戸」、「真砂の浜」、「金比羅」など地域の自然、さらに「権現山のテレビ塔」、「文化の波」など、当時の技術発展をテーマにしたものが選ばれている。特に、テレビ塔などはまさに当時ならではの歌詞の選択であると言える⁴⁰。このテレビ塔は、校歌制定の前年、1961年、NHKと南海テレビにより権現山に中継局が開局にともない建設されたものである⁴¹。

3. 3 ^{みつぐえ} 三机 第二小学校

大江地区にあった三机第二小学校は、明治期の三机小学校第二分校に由来する長い歴史を持つ小学校である。戦後1947年に三机第二小学校として発足するが、1978年に三机小学校に統合している。

瀬戸町誌によれば三机第二小学校は「校章・校歌なし」と記載されている⁴²。しかし、大江在住の井上奈津子氏によると、同氏の在学中の昭和20年代後半には校歌が歌われていた⁴³。リードオルガンの伴奏で児童が儀式などで歌っていた記憶が

あるとのことである⁴⁴。ただ、作詞、作曲者とも不明で記憶をもとに採譜した楽譜が掲載されている⁴⁵。

第2節は「大江の浜のひめこまつ姫小松」という歌詞で始まる。これは、かつては大江の浜にある岩石に生えていた小さな松のことで⁴⁶、続く「志津の波止場」は現在も残っている。三机第二小学校は、この大江地区と志津地区を校区としており、学校はその間の海を見下ろす高台に位置し、また「うるわしの瀬戸海」、「若草燃ゆる高原に」と謳われている。戦後間もない時期の校歌らしく、「若き日本よいざゆかん」という歌詞で締めくくっている。

3. 4 小島小学校

小島地区は瀬戸地区の三機の西側、伊予灘側に面している。

1975年に制定された校歌は、作詞は当時校長であり石見ヨネ子氏⁴⁷、作曲は松木織義氏である。この校歌も地区の自然や祀られている神社を歌詞に取り入れており、地区で最も標高が高い「見晴みはらし山⁴⁸」、伊予灘に面した岬「赤崎あかざき鼻」、小島地区の湾の再奥部の海岸沿いにある神社「住吉様」など誰もが知る場所、そして、樹木の香、小草、峰の白雲、磯の香、浜の小貝、沖の白浪、松の香、といった誰しも連想する内容を歌っている。

3. 5 川之浜小学校

川之浜は塩成の西側の宇和海側に面した地域である。

校歌制定は1967年、作詞は当時の校長の町本範一氏⁴⁹、作曲は、同校前校長であった松木織義氏である⁵⁰。この校歌も同様に、「黒潮寄せる宇和海の」など地域の自然を歌詞に取り入れている。特に「学園にそびえる黒松」は1975年頃に枯死するまで学校の象徴であった巨木の松林を意味し、同校校章もこの松の葉を組み合わせたものである。数百年の風雪に耐えた松をもって、同校の堅実な歴史と伝統・力強さと連帯の気風を表している⁵¹。

3. 6 たぶ田部小学校

田部は佐田岬半島の中心よりいく分西側の伊予灘側に位置する地域である。

校歌の制定は1967年、作詞は岡崎美千代氏⁵²、作曲は浜田ヤエ子氏である⁵³。「瀬戸の潮風」、「松のみどりの」といった自然を歌詞にした部分もあるが、全体的には子どもたちへの希望を歌詞の内容の中心に据えている。なお、高茂地区に1947年に牧畜や農業のための集団入植が行われ⁵⁴、1951年には田部小学校高茂分校が設立、1961年に廃止された⁵⁵。

3. 7 こうざき神崎小学校

神崎地区は、佐田岬半島の伊予灘側に突き出た部分で、両側を大きな湾に囲まれている。

校歌は1975年制定、作詞は和田直行氏、作曲は当時の校長中野勲氏である⁵⁶。「瀬戸の海辺」、「たかてやま高手山」など地域の自然をテーマに、子どもたちへの希望を歌詞に込めている。

3. 8 名取小学校

名取は三崎地区の宇和海側の海岸線沿いに細長い地形の地域である。海に近いが、海拔100~200mという高所にあり、急斜面に集落が形成された⁵⁷。

校歌は1969年制定、作詞は社会担当教諭政所光氏⁵⁸、作曲は丸山好徳氏である⁵⁹。学校から見下ろせた「宇和の海」、同校から遠くに見えた瀬戸地区の権現山⁶⁰、学校近くの岬である「梶谷かじや(鼻)の松」など地域の自然を取り入れている。

3. 9 かまぎ釜木小学校

釜木地区は名取の裏側、すなわち伊予灘側の湾の再奥部に位置する。

校歌は1972年に制定、作詞は職員一同、作曲は当時の同校校長山吉敏雄氏である⁶¹。第1節、第2節とも「伊予灘」、「みかんの山」と地域の自然を表す内容で始まり、後半は子どもたちへの希

望を歌っている。あた、第1節の「正しく、やさしく、元気よく」は校訓である。

3. 10 二名津ふたなづ小学校

二名津地区は伊予灘側から宇和海側の海岸近くまで広がる正方形に近い形をした地域である。

制定は1976年、児童が作詞したものを補作し、作曲は同校前校長丸山好徳氏である⁶²。当時同校教諭であった田村ヤエ子氏によれば⁶³、創立百周年を記念し校歌を制定することになり、同校児童会が作詞をし、それを教員が補作、前校長であった丸山氏に委嘱した。歌詞にある「桜」は校庭に立っていた学校のシンボルであり、「伽藍の山」は二名津地区の西側、明神地区と三崎地区の境にある山で、校庭からよく見えており、当時近視防止のため児童に遠くを見ることをさせた目的であったとのことである。小学校の周りにはみかん畑があり、これも「五百田いおだの丘のみかん畑」と歌詞に取り入れられている。

かつては漁業で栄えた二名津地区は、大正時代末期から、三崎、明神、松、名取などととも夏柑生産中心の農村となった。校歌は、創立百周年記念式典で披露され、同年の、創立百周年記念運動会では鼓笛隊により演奏された⁶⁴。

3. 11 松まつ小学校

松は三崎のシンボルとも言える伽藍山の北側、伊予灘に面した地域である。

校歌制定年は不明、作詞作曲校歌制定委員会である。この校歌も「瀬戸の海原北に見て、潮の香り満ちる里」、「伽藍の峰を仰ぎ見る、みかんの花からいわかおる里」、「唐岩おろしおろし背にうけて、松のみどりの匂う里」、と松地域の自然と風土を題材に児童への期待を込めた歌詞である。

唐岩は松地区の小字で、1890年に宇都宮誠集によりこの地区で三崎で初めて夏柑が栽培された地域である⁶⁵。唐岩からのおろし風、すなわち冬季に吹き下ろしてくる強い風を第3節の冒頭で歌っている。

3. 12 大佐田おおさだ小学校

大佐田地区は、三崎の南側、宇和海に突き出た先端近くに位置する。

この地域ではいち早く、1962年に校歌が制定された。作詞は中村（現萩野）松子氏、作曲は久米孝義氏である。当時の校長大島氏により校歌を作る計画が出され、歌詞を公募したとのことである。当時中学3年生であった中村氏は、「小学生でもわかる内容」の歌詞を作り当選、高校進学したのち表彰されている⁶⁶。中村氏は1953年より59年まで大佐田小学校に在籍、母校の校歌を作詞した。その際、学校から見えていた「みかんの白い花」、「海」、校庭にいつも飛んできていた「かもめ」、学校近くの磯辺に立っていた「松」といった自然、「小さくて狭い校舎」といった思い出をもとに作詞したと述べている⁶⁷。

3. 13 与修よほこり小学校

与修は佐田岬半島の先端近くの伊予灘側に位置する。

1983年に校歌制定、作詞はPTAを中心とする校歌制定委員会⁶⁸、作曲は阿部じゅんけい淳敬氏である。阿部氏は、当時の校長、教頭とは旧知の仲であり、そのような関係から作曲を依頼された⁶⁹。阿部氏にとっては1974年から1976年度まで初めて校長として赴任した学校であり、そこからの依頼ということで「懐かしかった」と述懐している。与修地区の生活道路は急斜面で細く、学校は地区の高台にあり、「母なる瀬戸の内海」を見下ろし、「天まで至る段々」を登り、「緑もゆる丘の上」にある学校の様子を表している。

3. 14 正野しょうの小学校

正野は佐田岬半島の最先端の地域で、南北を伊予灘と宇和海に挟まれている。校歌制定は1965年、作詞は地域の教育者であり数々の小学校校長を歴任し作曲当時愛媛県立三崎高等学校校長であった末廣重之氏⁷⁰、作曲は河野博氏である。「みかん」、「いそ」、「佐田の岬」などこの地域の

様子を歌詞に取り入れ、正野の子どもたちへのメッセージを込めたものになっている。

3. 15 ^{くし} 串 小学校

串小学校校歌に関しては極めて興味深い資料も残っており、作曲者も存命で、また平成の大合併とほぼ同時期に正野小学校とともに統合し、その結果新設された佐田岬小学校の校歌とも関係があるなど、当時の校歌の制定について調査する上で非常に重要であると考えた。そこで、ここでは串小学校校歌に関して詳述する。

串地区は佐田岬半島の先端部に位置し、小学校の歴史はこの地の他の学校同様明治初期に遡ることができる。すなわち、1871年頃から庵寺教育が始まり、その後串簡易小学校が設立された⁷¹。尋常小学校、国民学校を経て、戦後、1947年に串小学校として発足した。校歌が制定されたのは1980年であり、その経過が閉校記念誌に記載されている。校歌の制定に際し、ここまで明確に記載されている例は少なく、日本全国で次々に校歌が制定されていた時代の一つの制定にいたる経緯の例として非常に興味深い。ここにその核となる部分を引用したい。

校訓・校歌・校章の制定⁷²

一 校訓・校歌&校章の制定

○ 昭和五五年二月二八日と定める。(昭和五四年度)

二 制定の経過

(一)

○ 参観日、学級懇談会に於いて発想する。以来、具体化への構想を練る。

(二)

○ 本校の沿革および歴史の調査活動を開始する。本校三代校長佐々木歌之好允氏の記録に基づき本校の概要。校風樹立経過をたずねる。本校の沿革目下調査中、未完成。

○ 西宇和郡内の校訓・校歌・校章の調査活動を開始する。

(三) 昭和五三年一〇月二七日(金)

○ PTA 役員会において本校沿革参考資料発掘依頼。

(四) 昭和五四年一月一八日(月)

○ 制定の具体案検討、各方面の指導的助言を受ける。五四年度まで構想を温存する。

(五) 昭和五四年四月六日(金)

○ 校長事務引継時に経過報告、具体化への諸手続き承認。

(六) 昭和五四年四月一七日(火)

○ PTA 役員会において構想説明、協力依頼。予算の一部承認。

(七) 昭和五四年七月三日(火)

○ 本校 PTA 講演会において、校歌作詞者 八幡浜教育事務所長 菊池 勇先生 の講演拝聴時に作詞の意図を拝聴する。

(八) 昭和五五年二月二日(土)

○ 校歌作曲完成。伊方町立有寿来小学校長 阿部 淳敬先生。

(九) 昭和五五年二月一六日(土)

○ 校章完成。保内町立保内中学校教諭 楠井岑昌先生。

(十) 昭和五五年二月二八日(木)

○ 校訓・校歌・校章の制定。PTA 参観日において仮披露する。

中略

四 校歌

(一) 「校歌とは」について一言

○ 校歌は学校全体の象徴としての歌である。

子どもたちの「心の糧」となるものでありたい。学校行事や儀式に機会をとらえて歌うものである。子どもたちが三〇年、五〇年たった後にも、心のふるさととして価値を認めるものでありたい。親も子も共に口ずさむことができればと念じたい。それは、三〇年、五〇年先のことであうけれども、期待したい。串のある古老は、本校三代校長佐々木歌之好允先生に教えていただいた「串の子どもの歌」をかるく口ずさんでいた。目に当時の様子をしのびながら。

価値あるものを求めるために、言葉も旋律もやや高度になることは当然の理であろう。拍子は四分の四拍子が多い。ほとんどといってよい。まれに八分の六、四分の三、四分の二（原文のママ）拍子がみられる。「調」の面から見ると長調が多い。リズム、速度においても姿として雄大豪壮、優雅真摯といった感じを表すものが多い。

五 校章

(一) 校章製作者（デザイン）保内中学校教諭 楠井岑昌氏

(二) 制作の意図

- 地域の期待・願いをふまえて、文字・校訓・校歌の観点から検討する。
- 公明 串小学校を串小としてデザインの中心とする。

校訓	校歌	校章意図
たくましく	肩組んで 鍛え合う	文字・形の組み合わせで ・がっしりと手を組む。 ・協力
うつくしく	灯台 輝く	左右対称の美 ・心身のバランスのとれ美しい人に。（原文のママ）
やさしく	湧く 胸いっぱい の夢 伸びゆく	全体を曲線でまとめて ・まるやか ・のびのび 点を象徴する

以上は閉校記念誌の巻頭に掲げられた記述で、串小学校の校歌制定にいたるまでに経緯はもとより、当時の校歌に対する考え方や希望がはっきりと述べられている。また、同時に制定されたこともあり校訓、校歌、校章を関連付け、その意図も明確に記述されている。

上述の通り、作詞者は当時八幡浜教育事務所長の菊池勇氏⁷³、作曲者は阿部淳敬氏である。阿部氏は校歌制定当時、水ヶ浦小学校校長で、串長学校教頭とは旧知で、阿部氏によれば「大変なはりきりさんで」、校歌を作ることを取りまとめた⁷⁴。また、「海桐花咲く」で始まる言葉に誘われて作曲したと述懐している⁷⁵。

海桐花は、トベラ科の常緑低木で、串小学校の校庭に防風のために植えられていた⁷⁶。串小学校の象徴とも言え、機関誌のタイトルにもなっており、第30代校長伊東克夫氏は「冬季の季節風の強かったことは今でも体で覚えています。」と述べている⁷⁷。このような自然を歌詞に盛り込み、力強く勇ましく、まさに雄大豪壮なこの地ならではの校歌となっている。

3. 16 佐田岬小学校

佐田岬小学校は、串小学校と正野小学校の統合により、2005年の平成の大合併と同時に開校した。初年度は旧串小学校の、翌年からは旧串中学校の校舎を使用していた。串地区は佐田岬半島の先端部近くの瀬戸内海側に位置している。予想以上の児童数の減少により創立の9年後、2014年に閉校し、三崎小学校に統合された。佐田岬小学校校区を含む三崎地区は、特に若年層の減少が激しく、2005年から2015年の10年間で、18未満の住民がいる世帯が実に45.5%も減少した⁷⁸。

閉校記念誌で当時の校長が述べているように、「串小学校、正野小学校の統合の際して、保護者・地域の住民より『両校の良さを十分に引き継ぎながら、佐田岬の地に根ざす新しい教育を』との念（おも）いは、新しい校歌の中にも見事に表されて」いる。串小学校校庭に暴風のために植えられていた海桐花（とべら）はその象徴であり、また、すぐ近くにある佐田岬、そして灯台、これ

から旧校歌から引き継がれた歌詞である⁷⁹。閉校時の校長は次のように閉校記念誌の巻頭で述べている。

「海桐咲く、岸は灯台立つところ…、風すさぶ、岬(はな)は渦潮舞うところ…」串小学校校歌の一節であります。「みんな優しい正野のよい子 嵐に負けぬ 清い花…、佐田の岬の灯台の灯は闇夜の海の守り神…」小の小学校の校歌の一節であります。そして「ふるさとはここ トペラ咲く里…、風が舞う舞う岬の鼻に 遠く厳しい山坂を…、大空へまっすぐ伸びた灯台に…」は、二校の校歌の真髓をうまく取り入れた佐田岬小学校の校歌の一節であります。⁸⁰

佐田岬小学校の校歌は開校が決定された後、長らく愛媛県西部で教員を務め、また民話を収集し出版もしていた和田^{よしたか}良馨氏に委嘱された⁸¹。氏は、様々な民話を収集するばかりではなく、小学校などを訪問し読み聞かせる活動を行っていた。閉校し統合することになった串小学校や正野小学校での訪問の際に、児童との交流の中で校歌の歌詞作成を行うに至ったと思われる⁸²。作曲は菊池克也氏で、作詞者和田氏の教え子であると同時に、同じ学校に勤務したこともあり、そうした縁から作曲を依頼された。菊池氏によると、同氏は三崎地区にある三崎高等学校に11年間勤務しており、佐田岬小学校近辺の自然や風景をよく知っており、「現代風でフォーク調」の校歌を作り上げた⁸³、とのことである。

3. 17 ^{みつくえ} 三机中学校

三机中学校は、1947年、開校の半年後10月に校歌が制定された⁸⁴。作詞者は有志、作曲者は愛媛大学教育学部助教授の清家嘉寿恵氏である⁸⁵。開校当時はは三机村立で、「瀬戸の内海^{うつみ}」^{すか}、「須賀の浜風さみどりの」^{おおみね}、「大峰の松^{まつ}」^{さし}、「佐田の岬」など三机、あるいは佐田岬の自然を歌詞に含んでいる。須賀は三机湾に突き出た砂嘴で、長い年月をかけ、潮の流れで自然に土砂が堆積されてきた場所で、その若草や若葉のようなきもちの

よい色浜風が吹いてくる様を歌っている。現在では須賀公園になっている。

また、終戦直後であることを反映して、「自由の旗の下に立つ」、「正義の旗の下に立つ」、「真理の旗の下に立つ」中学生に、「誓いをかたく師と友と」、「いばらの道をひらきゆ」き、「若き日本を興さんと」することを望む強いメッセージを込めている。

3. 18 三机第二中学校

1954年三机中学校より独立した。記録によれば校旗・校章は制定されたが、校歌は制定されていない⁸⁶。

3. 19 四ツ浜中学校

四ツ浜村は、1889年、大久浦、川之浜浦、田部浦、神崎浦の4つの浦が統合し成立した。この4つに戦後開墾された高茂を校区としていた。

1958年校歌制定、作詞は同校職員、作曲は高橋邦夫氏である。三机中学同様、地域の自然に加え、戦後民主主義への期待を込め、「自由の声」、「正義の道」、「平和の光」といった言葉を取り入れている。

3. 20 二名津中学校

二名津中学校校歌は上記2中学校より少し後、1963年に制定された。当時岬高等学校校長で二名津中学校初代校長の末廣重之氏⁸⁷、作曲は、大佐田小学校校歌も作曲した久米孝義氏である⁸⁸。ここでも地元の自然と、「正義」、「真理」、「新しき世」といった戦後民主主義と経済発展を思わせる歌詞を取り入れている。2006年、町村合併直後三崎中学校に統合合併している。

3. 21 串中学校

串は佐田岬半島最先端手前の地域で、北側伊予灘と南側宇和海で挟まれている。

1960年に制定された校歌は、末廣重之氏作詞、清家嘉寿恵氏作曲である。佐田岬半島先端部に近いことから、「四国ののびて佐田岬、坊与ほうよの渦の舞うところ」、「闇路を照らす灯台の」、などの風景、「権現(山)の森」など自然、そして「世界の海に乗り出さん」と若い世代への期待を込めた高度成長期直前の様子を色濃く残している。

3. 22 現在の伊方町内の小中学校

現在、伊方町内の小中高等学校は、伊方小学校、水ヶ浦小学校⁸⁹、三机小学校、大久小学校、三崎小学校、伊方中学校⁹⁰、瀬戸中学校、三崎中学校、愛媛県立三崎高等学校である。それぞれの校歌に関して概略を述べる。伊方小学校校歌は1962年度から1970年度まで同校校長の梶谷駒繁氏作詞、宇都宮義秋氏作曲。九町小学校は、2015年、二見小学校との統合の際新しい校歌を制定した。作詞は佐田岬半島出身の俳人、国文学者である坪内稔典としのり氏⁹¹、作曲は若槻吉泰氏である。三机小学校校歌は1972年制定、有志作詞、田中政子氏作曲である。大久小学校校歌は、1974年制定、作詞有志、作曲は阿部淳敬氏である。当時阿部氏は与修小学校校長で、前任の村井猛氏を通じ依頼されたとのことである⁹²。三崎小学校校歌は、成本信夫氏作曲、山内貞行氏作曲である。伊方中学校校歌は開校と同時に、1998年制定、作詞は坪内稔典氏⁹³、作曲河野美砂子氏である。瀬戸中学校校歌は、三机中学校と四ツ浜中学校が統合し開校した1994年制定、石見利仁氏作詞、高重理恵氏作曲である。三崎中学校校歌は、1953年制定、同校第2代校長末廣重之氏作詞、愛媛大学教育学部助教授清家嘉寿恵氏作曲である。愛媛県立三崎高等学校校歌も同中学校と同様に1953年、三崎高等学校元校長末廣重之氏作詞、清家嘉寿恵氏作曲である。

4. 終わりに

昨年の旧伊方町地域に引き続き、旧瀬戸町、旧三崎町の校歌の調査を行ったが、閉校後かなりの時間が過ぎてしまった例も多く、楽譜収集、情報

収集は困難を極めた。今回、数度にわたる現地調査時に助けていただいたり、資料収集、電話を含むインタビュー、書簡など様々な形でご協力いただいた、阿部淳敬氏、阿達雅子氏、井上奈津子氏、今田照世氏、荻野松子氏、菊池克也氏、高嶋賢二氏、田村ヤエ子氏、中井雄二氏、宮本富恵氏に深く感謝したい。

すでに述べた通り、瀬戸地区、三崎地区の若年層の減少率は全国的に見ても極めて高く、この傾向はさらに続く。全国でもこのような過疎化は多くの地域で進み、これまでもこれからも小中学校の閉校統合は多くなっていくことが予想される。校歌はその学校のシンボルであり、本来申小学校の趣意書にもある通り、「子どもたちが三〇年、五〇年たった後にも、心のふるさととして価値を認め」、「親も子も共に口ずさむことができ」るものである⁹⁴。しかし、その願いも虚しく閉校になった学校の校歌は歌い継がれることはない。その役目を終え忘却の彼方へと消え去っていく。完全に忘れ去られ消え去る前に記録に残し人々の記憶に残すためには、その制定時の理念を思い起こし、(伴奏付きの演奏できる状態の)楽譜の形で残しておくことは重要であり、今がその最後の機会であると言える。

本報告が不完全ながらも収集した情報を提示し、他地域における消え去っていく校歌についても人々の興味を喚起することができれば、その目的を達成したといえよう。

2018年3月

参考文献：

- 1) 市川克明、「伊方町(旧)における閉校になった小中学校の校歌について」、愛媛大学地域創成研究年報第12号、愛媛大学地域創成研究センター2017、p. 28-44
- 2) 市川克明、「興居島(松山市)における閉校になった小学校の校歌について」、愛媛大学地域創成研究年報第11号、愛媛大学地域創成研究センター2016、pp. 1-11
- 3) 平成28年度伊方町教育要覧、伊方町教育委員会2015

- 4) 新伊方町十年のあゆみ, 伊方町政策推進課 2015
- 5) 「続伊方町誌」, 伊方町誌改訂編集委員会編 2005
- 6) 「戦後・西宇和教育史」, 「戦後・西宇和教育史」編集委員会 1992
- 7) 「瀬戸町誌」, 瀬戸町誌改訂編集委員会 1986
- 8) 「三崎町誌」, 三崎町誌改訂編集委員会 1986
- 9) 藤岡謙二郎, 「岬半島の人文地理 - 愛媛県佐田岬半島学術調査報告 -」, 大明堂 1966
- 10) 「愛媛県教育関係職員録 昭和 24 年度～昭和 55 年度」, 愛媛県中小校長会 1949-1980
- 11) 「愛媛県学事関係職員録 昭和 23 年度」, 愛媛県教員組合 1948

閉校記念誌

- 1) 串小学校閉校記念誌「海桐花の実」, 串小学校閉校誌委員会 2005. 3
- 2) 佐田岬小学校閉校記念誌 ^{ふるさと} 故郷 ^{ここ} は 岬, 伊方町立佐田岬小学校 佐田岬小学校統合準備委員会 2014. 3
- 3) 塩成小学校閉校記念誌 宇和の海原澄みわたり, 伊方町塩成小学校閉校準備委員会 2009. 3
- 4) 正野小学校閉校記念誌「正野の心いつまでも」三崎町立正野小学校, 三崎町立正野小学校, 閉校記念誌編集委員会 2005. 3
- 5) 名取小学校閉校誌, 名取小学校統合委員会 2003. 7. 31
- 6) 二名津小学校閉校記念誌 桜の園のまなびやで, 二名津小学校統合準備委員会 2015. 3
- 7) 二名津中学校閉校記念誌 風と緑に抱かれて, 伊方町立二名津中学校閉校準備委員会編集部 2006. 3
- 8) 三机中学校「閉校記念誌 わが母校」, 三机中学校閉校記念準備委員会 1994. 3
- 9) 与侈小学校「よぼこり 閉校記念誌」, 三崎町立与侈小学校, 侈小学校閉校記念誌編集委員 1993. 3

統計ほか

愛媛県伊方町町勢要覧,

<http://www.town.ikata.ehime.jp>,

20018. 3. 9

※本稿では、西暦表記を基本とし、書籍のタイトルなど必要に応じ年号を併記した。

脚注

- ¹ 市川克明, 「伊方町(旧)における閉校になった小中学校の校歌について」, 愛媛大学地域創成研究年報第 12 号, 愛媛大学地域創成研究センター 2017, p. 28-44
- ² うち 1 校は瀬戸町立田部小学校高茂分校(1961 年閉校)である。
- ³ うち 3 校は瀬戸町立四ツ浜中学校の川之浜分校, 田部分校, 神崎分校(いずれも 1949 年四ツ浜中学校に統合)である。
- ⁴ 2019 年 3 月で閉校予定, 伊方小学校に統合。
- ⁵ 必要に応じ, 旧町名を用いる場合, 「瀬戸地区」, 「三崎地区」と表記する場合がある。巻末の参考地図参照。
- ⁶ 「続伊方町誌」, 伊方町 2005, pp. 53-78, 「伊方町・瀬戸町合併協議会だより」, 伊方町・瀬戸町合併協議会 2002, 「キ・ラ・リ 伊方町・瀬戸町・三崎町合併協議会だより」, 伊方町・瀬戸町・三崎町合併協議会 2003-2005
- ⁷ 藤岡, p. 27
- ⁸ 「瀬戸町誌」, 瀬戸町誌編集委員会 1986, p. 161, 1610-1612 年塩成堀切工事, 1924 年, 1934 年の実地測量, 1965 年「三机航路開削計画路線案」, 1984 年「三机航路計画基本構想」など。
- ⁹ 「瀬戸町誌」, p. 722-723
- ¹⁰ 佐田岬半島(現伊方町内)には鉄道路線は存在しない。
- ¹¹ 「瀬戸町誌」, p. 735-738
- ¹² 大佐田小学校校歌の作詞者荻野(旧姓中村)松子氏によれば, 校歌作詞当時, 1960 年代前半に宇和島の女学校在籍し, 八幡浜から船舶で三崎(井野浦)まで帰省したという, 思い出話を伺った。2018. 1. 26 電話インタビューによる。
- ¹³ 「瀬戸町誌」, p. 735-738
- ¹⁴ 巻末の参考地図参照。
- ¹⁵ 1955 年 3 月 31 日に旧伊方村と旧町見村が合併。
- ¹⁶ 1956 年 6 月 1 日に旧三机村と旧四ツ浜が合併。
- ¹⁷ 1955 年 3 月 1 日に旧三崎村と旧神松名(かんまつな)村が合併。
- ¹⁸ 藤岡謙二郎, 「岬半島の人文地理」, 大明堂 1966, p. 3
- ¹⁹ 伊方町人口ビジョン, 伊方町 2016, p. 2
- ²⁰ 平成 27 年度国勢調査地方集計速報愛媛県, 愛媛県企画振興部政策企画局統計課 2015, p. 4

- ²¹ 2018年1月31日現在、伊方町住民基本台帳人口による。<http://www.town.ikata.ehime.jp>, 2018. 2. 18
- ²² 「伊方町人口ビジョン」, 伊方町 2016, p. 16
- ²³ 「伊方町人口ビジョン」, p. 2
- ²⁴ 卷末資料, 「表1:伊方町小中学校の統廃合の歴史」参照。
- ²⁵ 瀬戸地区9校が2校に, 三崎地区9校が1校になった。
- ²⁶ 瀬戸地区3校が1校に, 三崎地区3校が1校になった。
- ²⁷ 瀬戸地区・三崎地区の教育史に関しては, 「瀬戸町誌」瀬戸町誌編集委員会 1986, p. 753-857, 「三崎町誌」, 三崎町誌改訂編集委員会 1986, p. 561-606, 「戦後・西宇和教育史」, 「戦後・西宇和教育史」編集委員会 1992, p. 154-170 参照。
- ²⁸ 後に「代表委員会」となった。
- ²⁹ 1962年に神松名中学校から改称した。
- ³⁰ 卷末の参考地図, 「表2:瀬戸地区・三崎地区の学制改革後の小中学校とその校歌」参照。佐田岬半島の付け根東側から先端部に向かい, 瀬戸地区の小中学校, 三崎地区の小中学校の順に番号付けをしている。
- ³¹ おそらく伴奏譜は各学校の音楽教員が, 後任に直接伝承していく, というのが通常で, 多くの校歌の伴奏譜は閉校後散逸してしまったものと思われる。
- ³² 卷末楽譜資料参照。なお, 18 三机第二中学校は校歌なしのため欠番である。
- ³³ 「瀬戸町誌」, p. 783
- ³⁴ 1970年度から1972年度足成小学校校長。
- ³⁵ キク科ツワブキ属に属する常緑多年草。
- ³⁶ 襖鼻, 足成地区の先端にある岬の名称。
- ³⁷ 約700メートル。
- ³⁸ 1962年度から1964年度まで塩成小学校校長。1943年卒, 「愛媛県教育関係職員録 昭和37年度」, 愛媛県中小校長会 1962, p. 37
- ³⁹ 1949年卒, 「愛媛県教育関係職員録 昭和37年度」, p. 37
- ⁴⁰ NHK テレビ放送開始が1953年であり, その後, 1957年に, 日本教育テレビ(現:テレビ朝日), 富士テレビジョンが設立され, テレビが新しい時代の幕開けを告げているような時代でまさにテレビ塔はその象徴であった。
- ⁴¹ 「瀬戸町誌」, p. 1109
- ⁴² 「瀬戸町誌」, p. 785
- ⁴³ 「ふれあいいかた」平成27年10月号, 伊方町教育委員会事務局生涯学習室, p. 7
- ⁴⁴ 2018. 3. 6. 井上奈津子氏への電話インタビューによる
- ⁴⁵ 「ふれあいいかた」平成27年10月号, p. 7
- ⁴⁶ 2018. 3. 6. 井上奈津子氏への電話インタビューによる
- ⁴⁷ 1974年度~1975年度小島小学校校長。
- ⁴⁸ 牧場入植で開墾された高茂(こうも)地区との境にある山, 標高394メートル。
- ⁴⁹ 1939年愛媛師範学校本科第一部卒, 「愛媛県教育関係職員録 昭和42年度」, 愛媛県中小校長会 1967, p. 194
- ⁵⁰ 1962年度から1966年度まで川之浜小学校校長, 1931年愛媛師範学校乙種卒業, 「愛媛県教育関係職員録 昭和41年度」, 愛媛県中小校長会 1966, p. 152
- ⁵¹ 「瀬戸町誌」, p. 792-793
- ⁵² 当時の同校の算数と家庭科の教諭, 1965年愛媛大学教育学部学卒, 「愛媛県教育関係職員録 昭和42年度」, 愛媛県中小校長会 1967, p. 195
- ⁵³ 当時の同校の音楽と図工の教諭, 1964年卒, 愛媛県中小校長会 1967, p. 195
- ⁵⁴ 「瀬戸町誌」, p. 1107
- ⁵⁵ 「瀬戸町誌」, p. 802-803
- ⁵⁶ 1974年度から1977年度まで神崎小学校校長, 1943年愛媛師範学校卒, 「愛媛県教育関係職員録 昭和50年度」, 愛媛県中小校長会 1975, p. 197
- ⁵⁷ 1615年, 仙台の伊達家が藩主として宇和島に入府した折, 軍夫として同行した人々を宇和海の見張り役としてこの地に定住させたのが始まりで, このときの人々が奥州名取郷(現在の宮城県仙台市と名取市)の出身であったことから, 名取という名が付いたといわれている。
- ⁵⁸ 1958年大卒, 「愛媛県教育関係職員録 昭和44年度」, 愛媛県中小校長会 1969, p. 199
- ⁵⁹ 1946年愛媛師範学校卒, 当時旧保内町立喜木津小学校校長, 「愛媛県教育関係職員録 昭和44年度」, 愛媛県中小校長会 1969, p. 195
- ⁶⁰ 名取地区から瀬戸地区の権現山までは直線距離でも10キロあるが, 名取小学校から見えていた。第27 第三崎町立二名津小学校校長田村ヤエ子氏への電話インタビューによる, 2018. 2. 28
- ⁶¹ 1940年旅順師範学校卒, 「愛媛県教育関係職員録 昭和47年度」, 愛媛県中小校長会 1972, p. 191
- ⁶² 同校の前校長であり, 制定当時は退職あるいは転任, 田村ヤエ子氏への電話インタビューによる, 2018. 2. 28
- ⁶³ 1974年度~1978年度二名津小学校教諭, 1999年度~2001年度同校第27代校長, 二名津出身。

- ⁶⁴ 以上、田村氏へのインタビューによる、2018. 2. 28。
- ⁶⁵ 「二. 佐田岬半島の夏柑(夏みかん)栽培①」, 愛媛県史 地誌Ⅱ(南予)データベース『えひめの記憶』, <http://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/34/view/4874>, 2018. 3. 6
- ⁶⁶ 荻野(旧姓中村)松子氏への電話インタビューによる、2018. 1. 26
- ⁶⁷ 荻野氏へのインタビューによる、2018. 1. 26
- ⁶⁸ 公式には校歌制定委員会となっているが、阿部氏の書簡では、PTAが中心になっていたようである。
- ⁶⁹ 阿部淳敬氏からの書簡による、2018. 2. 15 付け
- ⁷⁰ 1934年愛媛師範学校卒、「愛媛県教育関係職員録昭和29年度」, 愛媛県中小校長会 1954, p. 101, 「愛媛県教育関係職員録昭和39年度」, 愛媛県中小校長会 1964, p. 237
- ⁷¹ 「三崎町誌」, p. 564
- ⁷² 串小学校閉校記念誌「海桐花の実」, 串小学校閉校誌委員会 2005. 3, 巻頭
- ⁷³ 菊池勇氏は1969年度から1970年度にかけ、三崎町立串中学校校長を務めた。
- ⁷⁴ 阿部氏からの書簡による、2018. 2. 15 付け
- ⁷⁵ 阿部氏からの書簡による、2018. 2. 15 付け
- ⁷⁶ 2018. 2. 20 元三崎中学校教頭今田照世氏へのインタビューで。
- ⁷⁷ 串小学校閉校記念誌「海桐花の実」, 串小学校閉校誌委員会 2005. 3
- ⁷⁸ 「伊方町人口ビジョン」, p. 17
- ⁷⁹ 佐田岬小学校閉校記念誌 故郷(ふるさと)は岬(ここ), 伊方町立佐田岬小学校 佐田岬小学校統合準備委員会 2014. 3, p. 4
- ⁸⁰ 佐田岬小学校閉校記念誌, p. 4
- ⁸¹ 旧保内町出身で、長らく愛媛県西部の社会科高等学校教員として勤務した。「伊予の伝説散歩」, 「岬十三里・ふるさとばなし」, 「釣りとは女は…岬半島釣り歩き」などの著書がある。
- ⁸² 2018. 3. 2 菊池克也氏への電話インタビュー
- ⁸³ 2018. 3. 2 菊池克也氏への電話インタビュー
- ⁸⁴ 瀬戸町誌, p. 810
- ⁸⁵ 清家氏については、市川克明, 「興居島(松山市)における閉校になった小学校の校歌について」, 愛媛大学地域創成研究年報第11号, 愛媛大学地域創成研究センター 2016, p. 5-6 を参照。
- ⁸⁶ 瀬戸町誌, p. 812
- ⁸⁷ 「戦後・西宇和教育史」, 「戦後・西宇和教育史」編集委員会 1992, p. 168, 注…参照。
- ⁸⁸ 大佐田小学校校歌は1962年, 二名津中学校校歌は1963年と、相次いで久米孝義氏が作曲した。
- ⁸⁹ 水ヶ浦小学校校歌に関しては、市川 2017, p. 35
- ⁹⁰ 旧伊方中学校校歌に関しては、市川 2017, p. 37-38
- ⁹¹ 稔典(ねんてん)という俳号を持つ。
- ⁹² 村井氏は当時二名津小学校校長, 阿部氏からの書簡による、2018. 2. 15 付け
- ⁹³ 稔典(ねんてん)という俳号を持つ。
- ⁹⁴ 串小学校閉校記念誌「海桐花の実」, 巻頭

参考地図

佐田岬半島（現伊方町）地域の小中学校

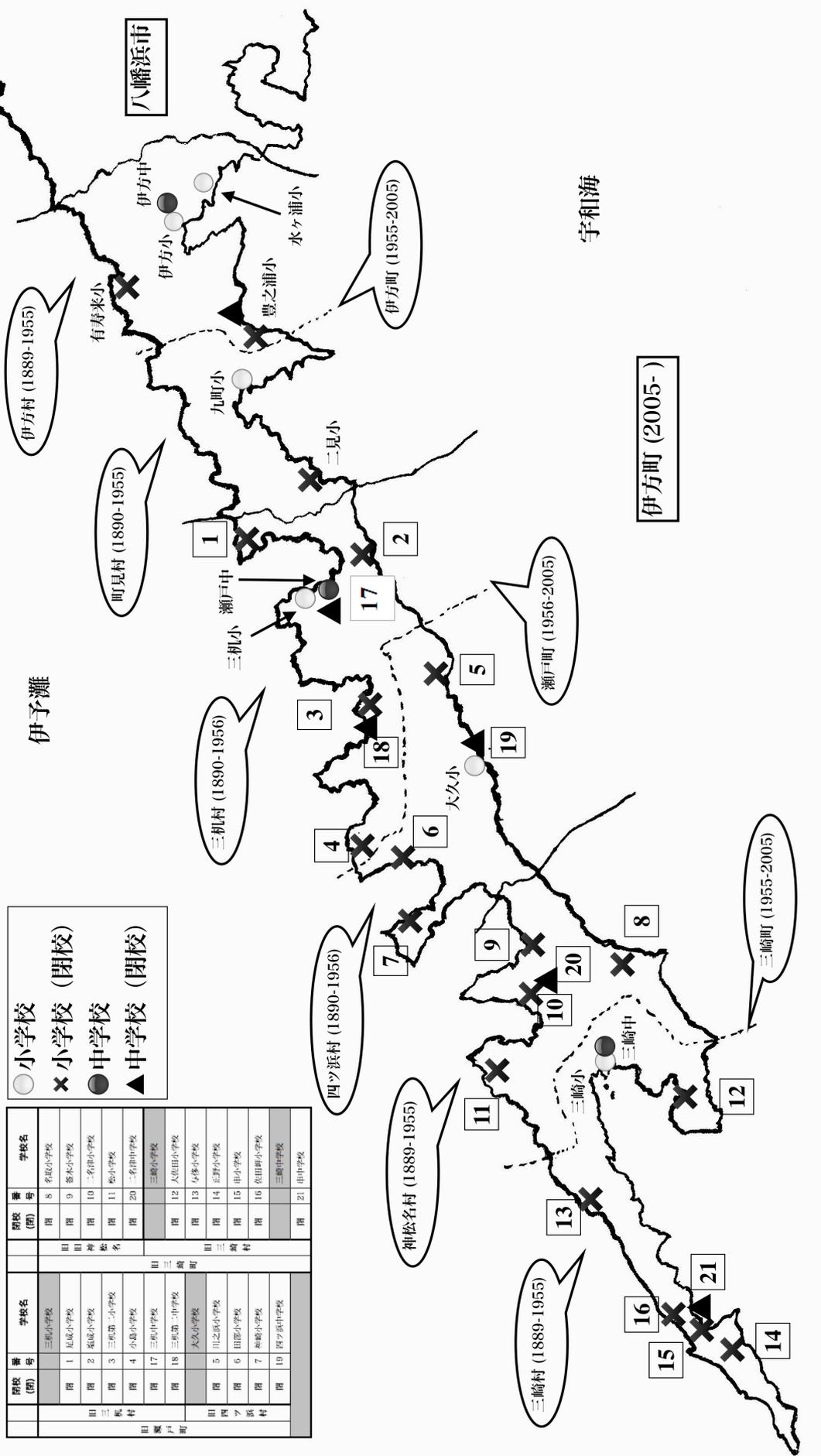


表2：瀬戸地区・三崎地区の学制改革後の小中学校とその校歌

地区	地区	閉校 (閉)	番号	学校名	閉校年	制定年	作詞者	作曲者		
旧瀬戸町	旧三机村			三机小学校	—	1972	有志	田中政子		
		閉	1	足成小学校	1982	1972	村井猛	岡井伸一		
		閉	2	塩成小学校	2009	1962	菊岡政雄	三木竹次郎		
		閉	3	三机第二小学校	1978	1950?	?	?		
		閉	4	小島小学校	1986	1975	石見ヨネ子	松木織義		
		閉	17	三机中学校	1994	1947	有志	清家嘉寿恵		
		閉	18	三机第二中学校	1978	なし	なし	なし		
	旧四ツ浜村				大久小学校	—	1974	有志	阿部淳敬	
		閉	5	川之浜小学校	2003	1967	町本範一	松木織義		
		閉	6	田部小学校	1979	1967	岡崎三千代	浜田ヤエ子		
		閉	7	神崎小学校	1980	1975	和田直行	中野勲		
		閉	19	四ツ浜中学校	1994	1958	本校職員	高橋邦夫		
	旧三崎町	旧三崎村	閉	8	名取小学校	2003	?	政所光	丸山好徳	
			閉	9	釜木小学校	1977	1972	職員一同	山吉敏雄	
			閉	10	二名津小学校	2013	1976	児童(補作)	丸山好徳	
			閉	11	松小学校	1977	?	校歌制定委員会	校歌制定委員会	
			閉	20	二名津中学校	2006	1963	末廣重之	久米孝義	
		旧神松名村				三崎小学校	—	?	成本信夫	山内貞行
			閉	12	大佐田小学校	1991	1962	中村松子	久米孝義	
閉			13	与侈小学校	1993	1983	校歌制定委員会	阿部淳敬		
閉			14	正野小学校	2005	1965	末廣重之	河野博		
閉			15	串小学校	2005	1980	菊池勇	阿部淳敬		
閉			16	佐田岬小学校	2014	2005	和田良譽	菊池克也		
					三崎中学校	—	1953	有志	清家嘉寿恵	
閉			21	串中学校	2004	1960	末廣重之	清家嘉寿恵		

楽譜資料

1

足成小学校校歌

作詞：村井 猛
作曲：岡井 伸一
伴奏パート：市川克明

一
しおな
潮鳴り高き 伊予灘の
さち
幸ある磯べ 胸張って
ぼくもわたしも 元気な子
ああ 足成校 希望わく

二
校庭のさくらや つわぶきの
花さながらに 寄り合って
みんな明るく やさしい子
ああ 足成校 響りあり

三
あしがき
葦群繁る ふるさとの
栄ある歴史 受けついで
みんなすすく 伸びゆく子
ああ 足成校 誇りあり

四
光をとす ふすま鼻
うまず たゆまずともどもに
学びの業に いそしむ子
ああ 足成校 使命あり

2

塩成小学校校歌

作詞：菊岡 政雄
作曲：三木 竹太郎

一
うなぼら
宇和の海原澄みわたり
瀬戸の門戸と知られたる
港に高くそびゆるは
明るいわれらの塩成校

二
まさご
真砂の浜や金比羅の
自然の恵み豊かなる
強く優しい心根に
誇りも高き塩成校

三
ごんげんやま
権現山のテレビ塔
文化の波を身に浴びて
理想を高く掲げつつ
学ばわれらの塩成校

3

三机第二小学校校歌

作詞：不明
作曲：不明
伴奏パート：市川克明

あ あ う る わ し の せ と う み や わ か く さ も ゆ る こ う げ ん に
だ か れ て そ だ つ だ い に こ う つ ど い の ま な び や
ち い さ く と も わ れ ら が の ぞ み そ ら か け る

一
ああうるわしの瀬戸海や
若草燃ゆる高原に
だかれて育つ第二校
つどいの学び舎小さくとも
われらが望み空かける

二
大江の浜の姫小松
志津の波止場の岩白く
ともにむつみし第二校
幼き日の夢多く
思いは尽きぬ同胞よ

三
世紀の波を押しながら
世に出し兄や姉たちに
続かんわれらの第二校
朝日に輝くさくら花
若き日本よいざゆかん

4

小島小学校校歌

作詞：石見 ヨネ子
作曲：松本 織義
伴奏パート：市川克明

み は ら し や ま の き ぎ の か が た だ よ う に わ ほ こ じ ま こ う
の べ の こ ぐ さ も こ え た か く お お き く の び る と き げ ん で る
ほ く も お お き く む ね は ろ う み ね の し ら く も ま ね い て る

一
見晴山の樹木の香が
漂う校庭は小島校
野辺の小草も声高く
大きく伸びると叫んでる
ぼくも大きく胸張ろう
峰の白雲 招いてる

二
赤崎鼻の磯の香が
漂う校庭は小島校
浜の小貝も声清く
大きく育つとささやいた
わたしも大きく胸張ろう
沖の白浪 招いてる

三
住吉様の 松の香が
漂う校庭は小島校
おきのはやも水澄みて
故郷美しと語ってる
われらも歴史を受け継ごう
明るいあしたを招いてる

5

川之浜小学校校歌

作詞：町本 範一
作曲：松木 織義
伴奏パート：市川 克明

くろしおよせる うわかいの ひかりあ
まねき まなびやよ われらがぼこ
かわのはま あかるく なおき みちひたに
ひとみかがやく きみとぼく

一
黒潮寄せる 宇和海の
光あまねき 学び舎よ
吾等が母校 川之浜
明るく直き 道ひたに
ひとみ輝く 君とぼく

二
にわ
学園にそびえる 黒松に
昔のひびき 今もあり
吾等が母校 川之浜
強く正しく 肩くみて
眉芳しき 君とぼく

6

田部小学校校歌

作詞：岡崎 三千代
作曲：浜田 ヤエ子
伴奏パート：市川 克明

あさのひかりを いっぱいに わかさみ
なぎる たぶしよ うの みんな みんな
はたらく こゆたかなあすをつくるのだ

一
朝の光を いっぱいに
わかさみなぎる 田部小の
みんな みんな 働く子
豊かなあすを つくるのだ

二
瀬戸のしお風 さわやかに
生命あふれる 田部小の
みんな みんな 仲よい子
楽しいあすを つくるのだ

三
松のみどりの いつまでも
あこがれもえる 田部小の
みんな みんな やさしい子
明るいあすを つくるのだ

7

神崎小学校校歌

作詞：和田 直行
作曲：中野 勲
伴奏パート：市川克明

せ と の う み べ に か お る か ぜ
— お お し く の ぼ る お ひ さ ま
の ひ かり を こ こ ろ の と も と し て た だ し く い き る
み ち を ゆ く わ れ ら の こ う ぎ き し ょ う が つ こ う

一
瀬戸の海辺にかおる風
雄々しくのぼる太陽の
光を心の友として
正しく生きる道をゆく
我等の神崎小学校

二
緑ゆたかな^{たかてやま}高山
青空高く仰ぐ塔
深い心を求めつつ
希望の雲にのってゆく
我等の神崎小学校

三
郷土にほこる^{ばんしゅう}番匠に
よせる波風強くとも
耐える心を身につけて
やさしい人に育ちゆく
我等の神崎小学校

8

名取小学校校歌

作詞：政所 光
作曲：丸山 好徳
伴奏パート：市川克明

み ず き よ ら か な う わ の う み は
る か に の ぞ む ま な び や に ま
こ と の み ち を ひ と す じ に あ か
る く ま な ぼ う な と り こ う

一
水清らかな 宇和の海
はるかに望む 学び舎に
真の道を ひとすじに
明るく学ぼう 名取校

二
望みは高く ^{ごんげん}権現の
尊き姿 仰ぎつつ
学びの道を ひとすじに
やさしく励もう 名取校

三
^{かじや}梶谷の松の ゆるぎなく
^{ひじり}聖の教え 身にしみて
愛の道を ひとすじに
正しく育とう 名取校

9

釜木小学校校歌

作詞：職員一同
作曲：山吉 敏雄
伴奏パート：市川 克明

いよなだあけて さわやかに
希望の風が 吹いてくる
正しく やさしく 元気よく
ゆたかな子どもに なりましょう
力をあわせて まなびましょう

ただしく やさしく げんきよく
じぶんで みんなで 考えて
あすの学校 きずきましょう
力をあわせて すすみましょう

ゆたかな子どもに なりましょう
ちからをあわせて まなびましょう

一
伊予灘あけて さわやかに
希望の風が 吹いてくる
正しく やさしく 元気よく
ゆたかな子どもに なりましょう
力をあわせて まなびましょう

二
みかんの山に かこまれた
歴史かがやく 釜木校
じぶんで みんなで 考えて
あすの学校 きずきましょう
力をあわせて すすみましょう

10

二名津小学校校歌

作詞：児童(補作)
作曲：丸山 好徳
伴奏パート：市川 克明

しおかぜかおる
せとうちの さくらのそのの まなびやに
えがおと はなにつつまれて あか しく きよく お
おらかに まなぶ たなづ しょうがく せい

一
潮風かおる瀬戸内の
桜の園のまなびやに
笑顔と花につつまれて
明るく清くおおらかに
学ぶ二名津小学校

二
がらん
伽藍の山を仰ぎみて
あした
朝につどうまなびやに
元気な声の満ちあふれ
強くりりしくたくましく
育つ二名津小学校

三
いおだ
五百田の丘のみかん畑
光り明るいまなびやに
ひごと
日毎の学び励みあい
なお
正しく直くすこやかに
伸びる二名津小学校

11

松小学校校歌

作詞：校歌制定委員会
作曲：校歌制定委員会
伴奏パート：市川 克明

Musical score for '松小学校校歌' (Matsuyama Elementary School Song). The score is in 4/4 time with a tempo of 104. It consists of a vocal line and a piano accompaniment. The lyrics are written below the vocal line.

一
瀬戸の海原北に見て
潮の香りの満ちる里
学びの歩み受け継いで
集う松の子明るい子

二
がらん
伽藍の峰を仰ぎ見る
みかんの花かおる里
尊い遺徳しのびつつ
学ぶ松の子優しい子

三
からいわ
唐岩おろし背にうけて
松の緑のおう里
輝く未来築こうと
育つ松の子がんばる子

12

大佐田小学校校歌

作詞：中村 松子
作曲：久米 孝義
伴奏パート：市川 克明

Musical score for '大佐田小学校校歌' (Osada Elementary School Song). The score is in 4/4 time with a tempo of 116. It consists of a vocal line and a piano accompaniment. The lyrics are written below the vocal line.

一
白い花咲く みかんの丘で
勉強しましょう 肩くんで
ピーチクさえずる小鳥のように
明るい子どもに なりましょう

二
かもめが来る来る 校庭に
運動しましょう 元気よく
磯辺の松の 姿のように
強い子どもに なりましょう

三
若葉のかげの 学びやは
狭いけれども わたしらの
理想は高い おおさだ
みんな良い子に なりましょう

13

与修小学校校歌

作詞：校歌制定委員会
作曲：阿部 淳敬
伴奏パート：市川 克明

ははなるせとのうちうみのいそのかただよ
うほまかせにつよくきたえてそ
だちいくわれらのよほこりしょうがっこう

一
母なる瀬戸の内海うちうみの
磯かの香漂う浜風に
強くきたえて育ちいく
我等の与修よほこり小学校

二
天まで至る段々に
夢と希望の花香り
明るく清く生きていく
輝け与修小学校

三
緑にもゆる丘の上
桜花咲く学び舎で
正しさ求め修めいく
栄えよ与修小学校

14

正野小学校校歌

作詞：末弘 重之
作曲：河野 博
伴奏パート：市川 克明

みかんの香り ただよう海は
ぼくらの庭よ 広い海
みんな元気だ 正野しょうののよい子
ななつの海の 海の子だ
ひろいうみ みんなげんきだ しょう
のよいこ ななつのうみの うみのこだ

一
みかんの香り ただよう海は
ぼくらの庭よ 広い海
みんな元気だ 正野しょうののよい子
ななつの海の 海の子だ

二
いその香りの うずまく海は
わたしの庭よ 青い海
みんなやさしい 正野のよい子
あらしに負けぬ 清い花

三
佐田の岬の 灯台の火は
やみ夜の海の 守り神
みんな正しい 正野のよい子
いまに世界を 照らします

15

串小学校校歌

作詞：菊池 勇
作曲：阿部 淳敬
伴奏パート：市川 克明

とべら きく き しは と うだい たつと ころ
う みよ ゆくてを か がや か せ はだに しお さ い ひ
び か せ て さ か え ゆ く く しよ うが っ ころ

一
とべら
海桐咲く
岸は灯台 立つところ
海よ行く手を 輝かせ
肌に潮さい 響かせて
栄えゆく 串小学校

二
風すさぶ
岬は渦潮 舞うところ
波よ沖から 寄せて来い
足しっかりと 肩組んで
鍛えあう 串小学校

三
日が昇る
丘は力の 湧くところ
雲よ世界へ 飛んで行け
胸いっぱい 夢乗せて
伸びてゆく 串小学校

16

ふるさとはこちら

(佐田岬小学校校歌)

作詞 和田良暈
作曲 菊池克也

(1) (2) (3) まか せお ぶら せお ぶら せお ぶら せお
あき ぼく みた のの こと たに かん へく ぶら せお もひら いか ほう せいの
のの うみを みる みる のの こと たに ぼく へく ぶら せお ぶら せお ぶら せお
へ ああ 二 ああ 二 きたた みる みる しょう がつ ころ ぶら せお ぶら せお
へ ああ 二 ああ 二 きたた みる みる しょう がつ ころ ぶら せお ぶら せお

一
しらなみ
寄せる白波ぼくらのこころ
返す思いは父母の海
ふるさと は ここ
トベラ咲く里
ああ、佐田岬小学校

二
風が舞う舞う岬の鼻に
遠くきびしい山坂を
自ら歩めと ああ
師の説く教え
ああ、佐田岬小学校

三
まっす
大空へ真直ぐ伸びた灯台に
ぼくらは誓うこの夢を
きょうの一步は また
明日へとつづく
ああ、佐田岬小学校

17

三机中学校校歌

作詞：有志
作曲：清家 嘉寿恵
伴奏パート：市川 克明

一
瀬戸の内海の夜は明けて
遠くよりくるさざなみの
須賀の浜風さみどりの
自由の旗の下にたつ
三机中学 生徒ぞわれら

二
世紀の鐘の高なれば
誓いをかたく師と友と
いばらの道をひらきゆく
正義の旗の下に立つ
三机中学 生徒ぞわれら

三
大峰の松日に映えて
佐田の岬の伸ぶところ
若き日本を興さんと
真理の旗の下に立つ
三机中学 生徒ぞわれら

19

四ツ浜中学校校歌

作詞：菊岡 政雄
作曲：三木 竹太郎
伴奏パート：市川克明

一
うしおはおどる 宇和海の
白砂の辺の 学び舎に
まことのいわれ きわめつつ
自由の声も 高らかに
たたえてつどう 四ツ浜中学生

二
東雲の陽に てりはえる
宇和の山々 遠く見て
愛の教えに はぐくまれ
正義の道に つき進む
血潮はもゆる われら若人

三
向かいが峰に ゆく雲の
彼方にわれらの 夢多く
四ツ葉のしるし はためいて
平和の光 できるところ
ここぞわれらの 四ツ浜中学生

20

二名津中学校校歌

作詞：末廣 重之
作曲：久米 孝義
伴奏パート：市川 克明

ふた なのしまに なをちなむ ほはなるだいち このさとの
か みの や—し—ろ—に まもられ—て き
よ—ら に か おる に ちゆ う せ い

一
二名の島に 名をちなむ
母なる大地 この里の
神の社に 守られて
清らに香る 二中生

二
春はたちばな 花香り
白馬はたける 瀬戸の海
医師はくろがね きたえなん
われら若人 二中生

三
愛と正義の 旗じるし
真理の道を きわめんと
高き希望を つらぬかん
われら雄々しき 二中生

四
御祖先の習い 守りつつ
新しき世の にない手を
永久に送らん わが母校
誇りぞ高き 二中生

21

串中学校校歌

作詞：末廣 重之
作曲：清家 嘉寿恵

し ごとく の の—び—て き だ み さ き
ほ う よ の う—ず—の まう と こ ろ
ご ん げ ん の—も—り し ず まり て
か が や—く い—ろ—か く し 中 学 校

一
四国のがびて佐田岬
坊与の渦の舞うところ
権現の森静まりて
輝く色か 串中学校

二
闇路を照らす灯台の
光の満ちはひと筋に
正義と愛の花じるし
北斗の星ぞ 串中学校

三
潮風すさぶおどおろし
鍛えし体このかいな
やさしき心永久に
いそしむ学徒串中学校

四
世紀の明日日は昇る
串中健児肩組みて
世界の海に乗り出さん
栄えよ母校串中学校